

フィンランドの作家たち（その4） Finnish Writers in Youkobo 2019

Finnish Writers in Tokyo in cooperation with the Union of Finnish Writers, Helsinki and
Youkobo Art Space, Tokyo

目次

・まえがき 村田達彦

・エッセイ

「5円（ご縁）硬貨が私を日本に誘い込んだ」
パイヴィ・ルッカリラ

「ダイヤモンドの道を探す」
マリアンヌ・バックレン

「現実の構成要素 - 2019年夏」
ユルキ・ヘイッキネン



まえがき

村田達彦

遊工房におけるアーティストや研究者の受入は1989年より始まり、国内外からの作家の創作・研究活動の滞在の場として定着してきました。国際機関からの推薦枠の受入も年々増えてきています。

本プログラムは、当方とフィンランド作家協会（UFW, The Union of Finnish Writers, Suomen Kirjailijaliitto）との間で2016年より始めたもので、東京のフィンランドセンターより紹介頂いたご縁が基です。

このフィンランド作家の受入は、昨年までの3年間で10人となり、無事契約を終了、本年より新たな3年間の交流が始まりました。

3名の作家が交代で春の各1ヵ月間のリサーチ滞在を行い、主に新作を生み出す良い機会となっており、また同時期、遊工房に滞在のアーティストたちとの交流も楽しんで頂いています。

このエッセイ集は、滞在中の異文化体験や、ご本人の作品についてなど、忌憚のない感想やご意見を頂きまとめたものです。主に視覚的な創造をする美術家とは少し異なる、言語を通して創造するライターの方々のコメントは、刺激的で面白いものです。2019年3月から3か月間のフィンランドからの作家による東京滞在の足跡をご覧ください。

2019年・FWU招聘・滞在作家

3月1～30日 パイヴィ・ルッカリラ

4月1～30日 マリアンヌ・バックレン

5月1～31日 ユルキ・ヘイッキネン



パイヴィ・ルッカリラ

1967年生まれ。フィンランドの作家兼演劇とフィンランド語の教員である。彼女は児童・青少年向けの小説14冊と大人向けノンフィクション2冊を執筆している。彼女の小説のテーマは、孤独と無力感から、自分の恐れを克服することまでさまざまである。2007年に小説「Koitetään kestää Nanna」でタンペレ市文学賞を受賞した。



マリアンヌ・バックレン

スウェーデン系フィンランド人のライターである。小説を主として14冊の著書を出版し、様々な文化誌にも寄稿している。彼女の小説「Karma(カルマ)」は八正道に基づく仏教をテーマにしている。2015年からの彼女の最新の小説では、戦争がいかに人々を傷つけ、引き離してきたか、自身の家族の歴史を調査している。



ユルキ・ヘイッキネン

フィンランドの詩人であり、グラフィック小説家、イラストレーターである。彼の作品は、断片や異なる現実と秩序と混沌の間の二元論とともに歪曲した地平線上で組み合わせられ時相で繋がる。彼の詩とイメージが物語を伝えているとしても、それは本質的な価値ではない。何が更に重要なのかと言えば、感情の高まり、夢の残響、そして、どこにも何物にもつながらない道なのだ。

5円（ご縁）硬貨が私を日本に誘い込んだ

パイヴィ・ルッカリラ

1970年代初め、ある夏の夕、父がヒッチハイカーに気づき停車した時に、私は両親と共に車中にいた。私たちは、その若い男性がフィンランド人ではないことに気づくと少し驚いた。彼のような顔立ちが黒澤映画や東洋のおとぎ話の中でしか見たことがなかった。会話は困難だったが、彼はラップランドに行ったことがあり、これからトゥルクに向かっているということは理解できた。

艶やかな黒髪に丸眼鏡の男性は、私の隣の席に座った。私は何も伝えられずまごついていて、彼は優しく微笑みかけてくれた。彼が車から降りると、私の手に穴の周りに外国語が書かれた硬貨を置いた。後に、その硬貨が日本のものであるとわかった。これが日本人との初めての出会いであった。それ以来、素晴らしい芸術と魅力的な物語の長い歴史を持つ遠い国は、私を魅了する。大人になってから、私は日本の文学を読み始め、修士論文で歌舞伎を学び、「Zenshindojo」という名の禅を行う場で行われる空手クラブに参加するようになった。いつか日本に旅してみたいと夢見た。

そのため、2019年3月の遊工房アートのスペースでのレジデンスプログラムに、フィンランド作家協会によって選ばれたという知らせを聞いた時は、非常に嬉しかった。この知らせを受けた当初は、少し心配していたことも認めなければならない。家族、友人や知人から7,700kmも離れていることに気づいた。また、日本語はいくつかの基本的なフレーズしか話せず、問題を対処できる語学力ではない。出発の数日前、私は新聞で日本の海岸で2011年の地震の前に現れた、リュウグウノツカイが見つかったという記事を読んだ。

私の飛行機が成田空港に到着した時、世界はまだ3月1日のままだった。私は、人口5000万人の都市で、自分の行先を見つけることが大変容易であるということに驚いた。その日の午後、無事遊工房に到着し、家に帰ってきたような気がした。滞在先はとても穏やかで、小さな池と桜のある素敵な庭があり、気分を高めてくれる。滞在中、遊工房の村田夫妻と辻さんはとても助けになり、いつもアドバイスや手助けをしてくれる。また、彼らは東京の美術館やアーティストイベントの情報を知らせてくれ、美しい明治記念館で開催されたフィンランドセンター東京主催のイベントに連れて行ってくれた。

私にとっての執筆活動は、コンピューターの前に座っているのと同じくらい歩いて行う。アイデアは動いている時の方が湧いてくる。遊工房に滞在中、私は日課として散歩をしていた。遊工房のエリアマップは、初めての杉並・武蔵野エリアを散策する際に役立ち、その後は東京での散歩コースの範囲を広げた。強烈な街の中のオアシスのような公園や、郊外の穏やかで細い通りを散歩したり、神社やお寺が限りなくあるエリアに入ったり、混雑した駅や賑やかな商店街を横切ったりした。私は遊工房がとても便利なおところにあることに気づき、満足であった。20分ほど歩くと2-3分バスに乗れば、4つの最寄り駅がある。そして電車に乗って、不思議な街・新宿や浅草、上野、原宿に1時間以内に行ける。滞在を終える前に、私は京都と奈良を訪れ、ついに見事な富士山を新幹線から臨むことができた。

全てを通して、私の滞在は期待以上のものであることがわかった。夢見ていた場所を自分の目で見たけれども、日本の歴史的建造物よりも何よりも目を見張るのは、日本人の優しさで温かさであった。何を言っているかを理解できなくても、問題ではなかった。私が道に迷ったら、彼らは私の手を掴み、道を教えてくれる。仕事面では、予定していた草稿初版を完了し、他のものにも着手し、東京で全く新しい小説の計画を打ち立てた。

結局、リュウグウノツカイは地震を予知するものではなかった。私が感じた唯一の火山作用による振動は、ごくわずかなものであった。私は喜びと日本で得た素晴らしい経験に圧倒され、帰国の途についた。キッチンに座り、自分のために日本茶を淹れ、再び桜をみる機会を心に抱き、今は自宅の庭にいる。



ダイヤモンドの道を探す

マリアンヌ・バックレン

1960年代初め、ヘルシンキでの子供時代、私は日本に関してある種ステレオタイプな考えと神話を持っていた。それは、桜と芸者、朱色の鳥居、富士山のような… 妹と私は日本のサクラクレヨンで素晴らしく色彩豊かな絵を描いていた。ラジオでは、私の好きだった坂本九の歌「上を向いて歩こう」が流れていた。ヨーロッパの人々が知る数少ない日本語の「スキヤキ」という名がつけられた・・・

10代の頃には、黒澤映画、俳句が有り、後に日蓮宗に出会い、フィンランドやスウェーデン在住の日本人と一緒に南無妙法蓮華經を唱えていた。「地上の欲望は悟り（煩惱即菩提）」、「毒を薬に変える（変毒為薬）」など、1276年に日蓮が書いた『煩惱即菩提書』からの言葉が重要になった。



4月上旬に遊工房に到着し、すぐに日本についてのいまだ生き生きと存在する幼少期の神話に出くわした。庭の満開の桜は、天国のような白い光を放っているように見えた。近くのスーパーを探していると、夕方の渋滞の途中で、朱色の鳥居を目にして泣けてきた。

数週間後、京都の伏見稲荷神社の鳥居のトンネルを見逃してしまったが、龍安寺の池にある小さな門のような、たった1つで十分な場合もある。新幹線の反対側の席に富士山の姿を垣間見た…

遊工房の静かな朝、桜の木がゆっくりと緑に変わる公園を散策した。その後、4月の終わりに、子供の日のための鯉のぼりが空を飛んでいた。こじんまりとした家々を通り過ぎて駅まで行く西荻窪行きのバスに短時間乗るのが好きだった。駅で荻窪行きの各駅電車に乗る前に、紀ノ国屋でコーヒーを飲み、そして丸の内線へ。”新宿”というのも、若い頃からのもう1つの魅惑的な名前である。

時々、選ぶのが難しい時があった。1日を家で過ごし、執筆や読書をして静かな近隣を楽しむか、東京を観光して地下鉄で疲れ果てる長距離を旅してみるのか。未来都市のガラス造りの建物、東京国際フォーラム、国立新美術館を見上げた。

私の東京はさまざまな音で満ちていた。ノイズと音声の両方を含む音響マットである。ゲーム・センターでは、まるで千匹のピカチュウが私を追いかけってくるように感じた。地下鉄の駅でのアナウンス、竹下通りの店の前で顧客に呼びかける単調な声。隅田川の鉄橋をゆっくりと渡る列車。強烈な突風が寺の墓地で卒塔婆を動かさしませ、始終、背の高い竹がざわざわしていた。

夕方の6時、私は遊工房の隣の小学校から聞こえて来る音楽を聞くのが大好きだった。それは鳥がねぐらの巣に帰って行くよ、という子供の歌。

遊工房での滞在は、さまざまな形で私にインスピレーションを与え続けた。年をとり過ぎないうちに、また日本に戻ってきたいと思う。アートスペースでの時間を共有した村田さん達と真木子さん、ジュリア・サントリさん、カイ・レンヌさん、そして、フィンランドのスポンサーであるKIDEに感謝を伝えたい。

近日公開予定の小説「Diamantvägen（ダイヤモンドの道）」の一節が形になりつつあり、おそらく次のようになるだろう。

広大な東京が窓の外に広がるホテルの部屋でジャン・バプティストを待つ。高層ビルの群れ、コクーンタワーを見つける。ブリュッセルから私達はドバイへ、ドバイから東京へ。ここが終点、ダイヤモンドの道の終わりだ。ジャン・バプティストにとって、それは、一握りのダイヤモンド原石のある南キブ州(コンゴ)のキガリの丘にある曲がりくねった赤い道から始まった…、今、彼は30代そこそこ、アントワープからロンドンへ、ニューヨークからテルアビブ…ムンバイ、スラト、バンコク、香港…知恵の経典による完璧なダイヤモンドカッティングなんだろうか？

私は不安と怒りの両方を感じながら彼を待つ。私は、渋谷交差点、おみくじの箱を人々が振る浅草寺を見たかった…やっ、銀座のティファニーの外で会おうというメールを受け取った。

私は待つて、そして待った。カルティエ、ブラダ、アップルストアを絶え間なく通り過ぎる人々の流れを見ていた。誰かが私に近づいてくる、それは若いボナヴェントゥラだ。
行こう、ジェシカ、彼は来ない。
彼はどこ？
知らない...

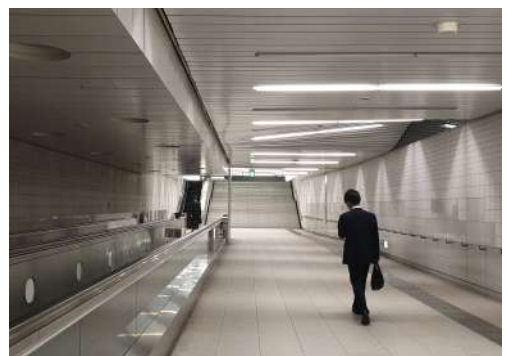
私達はホテルからチェックアウトし、ボナヴェントゥラは手ごろな価格のAirbnbの宿泊施設を探している。
さて、丸の内線で荻窪まで行こう...

彼はホストにさらなる指示を求め、私たちは電車に乗り、それからバスに、すべてが夢のように感じる。そして幻想を切り裂くダイヤモンド...

バスの運転手は「善福寺...」と告げた。ホストである若い日本のアーティストは、私たちに甘い一口の煎茶を提供する。近くの学校からの童謡が空気を満たし、桜の小さな花びらが落ち続ける...

「さまざまの 事 おもひ出す 桜かな」

芭蕉（英訳 R.H. Blyth）



振り返って戻り、幾度も渋谷交差点をいきつ、戻りつしたいと思う。虚空を越え、境界を越えて私はどこかに行くのだと感じる。そして同時に、周りを流れる人間の波の中に消えていく。ここにはいるはずのない、なじみのある顔に会い、私の名前を呼ぶのを聞くために。頭上には、広告スクリーンの点滅する光の熱気が氾濫している。重要なことが起こっているが、すぐに終息する。交差点の途中で立ち止まることはできない。何と簡単か、しかし私が掴むことができない何かが、中に潜んでいる。同時に非常に多くの事が起こっているため、動きの中心で、全方向を見たいと思った。煌めく残響は、あらゆる有り得ない遭遇と希望と喜びに満たされている。



東京での2日目、私はベッドルームに立って、壁を見つめながら携帯電話を手に持っていた。夕方、もう暗くなっている。バルコニーの引き戸は少し開いていて、バナナの葉が擦れる音で風を感じることができる。母は、ただ、「父が死んだ」と言った。私はこの広大な距離、家族、過去と未来を理解しようとした。東京の第一印象は、これらの混乱した副次的な道をもたらす。その瞬間、準備された作業計画は意味を失う。しかし、私は何もせずに居られないので、絵日記プロジェクトを継続することにした。少なくとも少しずつ毎日描くか、とにかく試してみることにした。しかしその前に、父の葬式のためにフィンランドへのフライトを手配する必要があった。

この悲しいニュースは、私の滞在期間を多かれ少なかれ特徴付け、時折、喪失感は東京の音や匂い、色と混ざり合った。素描は多くの場合、マップの設計に似ており、線は経る道筋ではあるが、必要な場合でもすべての道筋をたどる必要はない。何らかの方向を選べば、鳥のさえずり、通行人の珍しい表情、風のうなる音が、あなたを新たな状態に導くだろう。立ち止まって見すぎると、パターン形成は、形体を見つけれず、本質の要素は定まらない。結局のところ時には停止する必要がある、その後、可能性の混乱の海、または飛散する影の繋がりが目の前に広がる。

父は生前、自分の墓石に歩く人の像を選んでいて。彼は母と一緒にいく新天地への旅をいつも楽しみにしていたので、コロンプスと呼ばれていた。このニックネームのことを私が知らなかったというのは面白い、そして彼の強い意志は進む。おそらく、男は自分の記憶を選ぶことができるか、あるいは同じ記憶を度々編み出す。そして多分それは、忘れることが必要となる理由だろう。私の活動には、近く的环境が重要である。私は荒地や鉄道の車庫、近くの森にある錆びた自転車フレームから意味を探し出した。ゴミ箱から、過去からの伝言を、またガラスの破片から物語を見つけた。しかし、特に東京のような人口の多い都市では、荒地は減少傾向にある。

暑い日、善福寺公園の木陰のベンチに座っている。一羽のカラスが鳴いて、水が泉から池に向かって泡立っており、鳴き声を突然中断する短くけたたましい囀りが聞こえる。かなりの年齢の老人が、杖に寄りかかって道を歩いている。彼は灰色がかった茶色の半コートに帽子をかぶっていて、私を追い越す。彼は、しばらく歩き続けて立ち止まる。彼は、池や木立のもとに置かれた神社がある小さな島へと向かう。島は岸からわずか数メートルのところにある。昔は島への橋があったが、今は池の水が神社と公園を分離している。彼は帽子をとり、お辞儀する。しばらくの間じっと立ちつくし、それからまた歩き続け、道が曲がるところで木立の後ろにゆっくりと姿を消した。

東京では、見たものすべてを楽しんだ。バスの色、公園の案内板、マンホールの蓋のデザイン。全体として、音を通して日本が現実化した。地元のバスの子どもたちが録音したアナウンス、通りを行きかう際に聞こえる日本人のさまざまなイントネーション、代々木公園のカラスの合唱隊。そして最も目立たない日常の音のすべて、自転車からの音、捨てられた空き缶、レストランのキッチン、風が渦巻く音、レジデンスの庭でカサカサと音を立てる葉や蜂の羽音。

新大久保のコリアンタウンでは、数え切れないほどの人が行列に並んでいた。私は人々の表情から、列に並ぶか否か、踏み出す瀬戸際に立っていることに気づいた。午後の暑さで叫び声が聞こえる。ハットグ（コーンドック）の甘く脂っこい香りを味わうことができる。そして通りの反対側の反対方向でも同じ。私たちは周りの動きと雑踏、そして静かでとりとめのない吐息を見る。それを半ば理解することができるが、それにしても、時々それは多すぎる。

東京では多くの驚きを見つけた。それほど重要ではないが興味深いのは、新しい喫煙規制だった。古い映画や本から、日本での喫煙は習慣以上のものであると学んだが、現実には困惑した。東京の人々は、これらの新しい条例を非常にきちんと遵守しているようだった。私は自分の周りの秩序を探しているのも、それを見逃し、同時にそれを恐れている。ほとんどの場合、問題を受け入れるのは非常に簡単だった。ゴミやたばこの煙がないため、ある種のゆるみと無名性の雰囲気が生まれた。人口の多い環境では、私達は、さまざまな意味と一緒に漠然としたメッセージや曖昧な錯乱として汚れや過剰消費を見なす。

私は娘と一緒に浅草を歩き回り、時々特定のラーメン店を探し、電子タバコを使用する場所を探した。突然、目立たない小さなドアの窓に喫煙の許可の表示があることに気付く。ドアの後方には狭い前庭があり、左側にはレジが置かれた高いカウンターがあった。年配の紳士がカウンターで私たちを歓迎してくれた。カフェは小さく、とてもシンプルな内装だった。ぼんやりとした予感は、私たちが過去へと入って行ったような感覚を与えた。コーヒーは東京では最高で、お茶も最高だった。食器、テーブルクロス、家具は、私たちをあらゆる物に意味があると思う世界へ連れて行ってくれた。疲れた足を休ませ、窓の向こうの通行人を眺めた。今、私はどこにも急ぐ必要はないと感じた。カフェに座って、静けさと不思議を感じたかっただけ。

日中は東京を探索し、夜は絵日記プロジェクトを続けた。滞在期間の終盤に、遊工房での個展で、新しい画像を紹介する機会があった。悲しみは幸福と混合し、慕情は浅草寺の陽気な賑わいと混ざり合い、日比谷公園オクトーバーフェストの群衆に溶け込んだ。追悼は、ショッピングアーケードのカラフルな氾濫と通りの静寂へと逃げた。行く手は、言葉のない形体が現れ始める絵の中の線のように風景の中に消えた。

私は東京での滞在から多くを忘れるだろうが、出会った人々の温かさを忘れることはできない。近くの学校の屋上から、午後6時に地元の子供たちに家に帰るように呼びかける大音響のメロディを忘れることはできない。今、達彦は何を考えているのだろうか？ 金魚の池の表面の風の感触は、私たちに思い出させる。弘子はここにいた。夕暮れの暗い通りの窓の明かりは、未完成の仕事と真木子の声を思い出させる。すべてがそのまま。

